



城

第六十四回

おかじょう 岡城

～難攻不落の要害と荒城の月～

深草 祐一

今回は豊後国の岡城（豊後竹田城）です。作曲家の瀧廉太郎が「荒城の月」の作曲にあたり着想を得た城跡の一つとされています。建物は一切残っていませんが、石垣だけで充分見応えがある城として有名で、高い断崖の上に無数の石垣が構築され、重臣らの屋敷も含む広大な城域が広がっています。

島津軍が落とせなかった難攻不落の城

岡城は、大分県南部の山あい、熊本県の阿蘇からも近い位置にあり、二つの川に挟まれた比高約100mの山の上に築かれた城です。豊後守護大友氏の一族である志賀氏の城でした。岡城がその難攻不落ぶりを発揮したのは戦国末期。耳川の戦い（第49回「高城」参照）の後、急速に衰退する大友氏に対し島津氏が大攻勢に出た時のことです。関白豊臣秀吉が本格的に介入してくる前に九州全域を席卷すべく、島津軍は肥後方面と日向方面の2方向から大軍を進軍させ、大友氏の勢力圏を制圧していきました。肥後方面からは島津義弘が率いるおよそ3万が進軍し、大友方の城を次々に攻め落としていきました。しかし、志賀親次が守る岡城だけは落ちませんでした。当時20歳を過ぎた頃だった志賀親次は1500ほどの兵で岡城に立て籠もり、その天嶮を利用して島津軍の攻撃を再三にわたり撃退。ゲリラ戦を展開して島津義弘を悩ませました。そうしているうちに、島津軍は豊後を完全に平定しきれないまま、ついに豊臣の大軍勢来襲の報を聞くこととなります。総勢二十万もの豊臣軍を前にして豊後からの撤退を開始した島津軍は、落とすきれなかった岡城の志賀親次などから追撃を受け、大きな損害を出しました。そして、形勢逆転を懸けた根白坂の決戦にも敗れ、島津氏は豊臣秀吉に降伏したのです。戦後、志賀親次は豊臣秀吉から拔群の武功を賞賛され、大友家中での地位も一気に高まりました。しかしながら、後の朝鮮出兵の際、大友家当主の大友吉統は、明軍に囲まれて窮地に陥った小西行長隊を見捨てて撤退したことを叱責されて改易されてしまい、志賀親次も主家とともに所領を



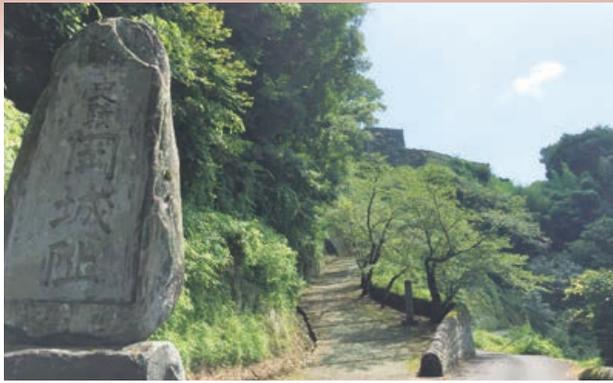
岡城本丸三重櫓石垣

失うことになったのです。この時、小西行長が既に討ち死にしたという誤報を信じて大友吉統に撤退を進言したのは志賀親次だったという話があるようですが、家中の嫉みによる讒言との説もあり真偽は定かではありません。なお、他の武将も小西行長からの救援要請を断っているのに処分されていないことから、豊臣政権が九州の旧勢力の排除を狙ったのではないかとの説もあるようです。結果として、旧大友領は豊臣の直轄地となり、奉行等の領地として分け与えられ細かく分割されていくことになります。

中川氏の入城

志賀氏が退去した後、岡城には中川秀成が7万4千石で入りました。この時、岡城は3年がかりの大改修が施されており、今に残る石垣群が構築されました。改修の際に大手口を変更していますが、築城名人として知られる藤堂高虎あるいは加藤清正から助言を受けたという伝説もあるようです。

さて、この中川秀成は、摂津の武将中川清秀の次男です。はじめ兄の秀政が家督を継いで13万石を領していましたが、朝鮮出兵の折、わずかな供回りのみで鷹狩りに出掛けたところを敵に包囲され討ち取られてしまいます。戦国の世において、このような「無覚悟」による



岡城大手口

無駄死には、家督相続を許さないのが当然という失態でした。しかしながら、賤が岳しずだけの戦いで討ち死にした父の武功に免じて、今回だけは知行半減で弟の秀成への相続が許されたのでした。賤が岳しずだけの戦いは、羽柴秀吉が織田信長亡き後に天下人となれるか否かの重要なポイントとなった決戦です。誰が誰に味方するか不安定な情勢下、戦の重要な局面で討ち死にするまで戦ったことが非常に重い意味を持ち、家の存続に大きく影響したことが分かるひとつの例といえるでしょう。中川清秀きよひでは、本能寺の変の後、中国大返しでいち早く畿内に戻ってきた羽柴秀吉に従い、山崎の戦いでは、同じく摂津衆の高山右近と共に最前線で明智勢と戦いました（第60回「勝龍寺城」参照）。やがて羽柴秀吉と柴田勝家との対立が激化し賤が岳しずだけの戦いが起こった際も、中川清秀きよひでは羽柴方に付いて出陣しました。互いに陣地を構築して両軍ともに隙を見せない中、秀吉が軍を分けて岐阜城攻略に向かったことにより戦局が動きます。この隙を突いて柴田方の猛将佐久間盛政が敵中深く進撃して中川清秀きよひでが守備する大岩山砦を急襲したのです。およそ倍の兵力によって虚を突かれた中川隊は壊滅しました。この際、中川清秀は隣の岩崎山砦の高山右近から撤退合流するように勧められたものの一歩も引かず奮戦して討ち死にしたといえます。佐久間盛政の猛攻を目の当たりにして、高山右近は岩崎山砦から撤退。また、賤が岳しずだけ砦の桑山重晴も砦を明け渡そうとすると、ここが急所とみた丹羽長秀が援軍に入って押しとどめています。ここで、柴田軍が動いたとの急報を聞いた秀吉が信じられない速さで軍を返してきます。秀吉の大返しでした。大岩山砦を占拠したまま留まっていた佐久間盛政は慌てて軍を退きますが、そこへ羽柴軍が総攻撃をかけました。前線で激しい戦いとなったその時、柴田軍の後方において、前田利家の部隊が突如撤退を開始したことから、柴田軍は総崩れとなり、羽柴軍の大勝利となったのでした。秀吉は、

この大返しによる奇襲成功の陰で散った中川清秀きよひでの武功を重く見ており、また、自分の策で作った隙を突かれたことで討ち死にさせてしまったことに引け目も感じていたと思われます。これが後の中川家存続につながったのでした。

さて、何とか家督を継いだ中川秀成ひでなりですが、関ヶ原の戦いの折りに存亡の危機に立たされます。上述のとおり朝鮮の役で改易されていた大友吉統よしむねが西軍の意を受けて豊後に上陸した際に、中川家に迎え入れていた旧大友重臣が中川家の旗印を持ち出して大友軍に馳せ参じたため、黒田如水から、中川は西軍に与したと徳川家康へ報告されてしまったのです。中川秀成ひでなりは必死に弁明し、豊後の西軍方の臼杵城を攻撃しました。そして、多くの家臣を失いながら奮戦したことで、なんとか所領を安堵されたのでした。

現在の岡城跡おかしょう

中川秀成ひでなり以降、岡城おかしょうは岡藩中川家の城として存続し、幕末まで続きました。明治の世となると、すぐに全ての建物が解体され、石垣だけが残りました。瀧廉太郎が幼少期に見たという岡城おかしょうは、現在と同様の石垣だけになった城跡でした。「荒城の月」は、土井晩翠が作った詩に瀧廉太郎が曲をつけたものです。土井晩翠は東北や北陸の城をいくつも訪れて作詞のモデルとしたと言われていますが、瀧廉太郎は幼少期を過ごした富山と豊後竹田の古城から曲の着想を得たとされています。瀧廉太郎は元々豊後の武士の家に生まれ、父の転勤に従って神奈川、富山、大分（豊後竹田）などで幼少期を過ごし、欧州留学中に結核にかかって帰国した後は、父の故郷である大分で療養するも23歳の若さで亡くなりました。岡城跡おかしょうには、遠くまで見晴らせる二の丸の一角に瀧廉太郎像が立てられています。また、南側の川を挟んだ道路にはメロディ舗装が施されていて、自動車のタイヤが奏でる「荒城の月」が谷を越えて岡城本丸まで聞こえてきます。



岡城の瀧廉太郎像